

宝山製鉄所の教訓

「かつてソ連を覇権主義と非難していた中国は最近、はしを下さうとして二階へ上がつて来なくなつた」——中嶋健雄氏はこんな表現で日中平和友好条約の覇権条項について、中国の対ソ認識転換を語つた。中国研究の第一人者で、また昨年秋には日ソ円卓会議にも出席するなどのソ連通でもあり、歴史的な流れを踏まえた中嶋氏の語は実に説得力にあふれていた。講演にはテーマから感じられる苦しさは全くなく、日中ソ三国の微妙な外交関係を整然と分析した中嶋氏の話に聴講者はじつと耳を傾け、今後の日中のかかわりを真剣に自問していた。講演要旨は次の通り。

中嶋嶺雄教授の講演要旨



講演する
中嶋嶺雄教授

第26回中日懇話会

消えた『覇権主義』

日中關係長期的視野で

たものが依然未解決ないし十分検討されていないという二つとだ。日中友好の目玉商品、経済協力のシンボルとされた宝山製鉄所は、今日一塊の鉄も生産していない。しかも第二期工事もまだ出来ていない。同製鉄所が稼働すると上海の電力はどのくらいかという問題も出てくる。

しかも、造られるのは鋼管や鋼材ではなく鉄板。年間一千万トも造ってどう使うのか。中国が車社会で車がどんな生産されるのかわからないが、今ばかりで想定できない。いつか宝山製鉄所も同じで

のか、どうしてあんなプロジエクトが進んでしまったのか、を徹底的に検討することが、今後の中国の近代化、日中経済協力を考える時に差し迫った課題ではないかと考える。

その後中国では一九七九年二周云典・台金工業部長が人

中 関 係

長期

的視野

中国はソ連に対する社会帝国主義、覇権主義という言葉、を一切の公文書から削除し、ソ連のSS20極東配備にも沈黙している。日本人は人がよくて中国にあおられ、対ソ戦略の第一線に立たされた問題が今後出て来そうな心配だ。

うし、留學生も十、七十、二百人、やがて三ヶ年から四ヶ
タになるう。シベリア開発
に、中国の労働力をもつてい
く二に、中国もソ連も乗り
氣になり食指が動くプロジェ
クトだろ。日本から北京を
見ただけでなく、たまにはモ
スクワから、ウランバートル
から北京を見ることも必要
だ。こゝ見れば中ソ關係は今
後かなり進み、ゆくゆくはな
んらかの同盟關係といふもの
のにならう。党と黨のレ
ベルでも關係改善の兆しがあ
る。

やはり社会主義国

中ソ貿易いずれ『日中』並みに

開放体制と近代化

最近の中国の転換は急激だが、今の開放体制は定着してはいない。この転換はわずかの二年半のことで、先の全

それにどう立ち向かうかの理念だが、現実にはテキストで一夜讀けをし、良い点をとりとうとしている。甘く見ていると日本は期待だけが膨らみ、その通りにならないことになる。

戦して引き締めていく。日本人にとつては物わかりのいい、開かれた社会だが、中国人にとつては住みにくい。そういう批判が出てきている。深圳経済特別区は、近代化のショーウィンドーみたいなもの

総額も台湾と同じくらいのも
百数十億^{ドル}で、中国の転換と
いっても問題が多い。

寸土をめぐる争い、戦争、前になつたのが、今は領土問題については何も言わなかつた。三つの障害は和緩できない二国間の対立条件ではもはやなく、どちらかといへば向こう三軒両隣の問題に

みて、引き締めが始まっている。これをつかんでいないのと、第二次中国ブームの結算と同じようなことが起きる。来年から始まる第七次五年計画でも高度成長を抑制している。農工業生産の四一四の伸びが毎年続くはずがない。農村では拝金主義がまみれ、テレビ、オートバイが売れ始めているが、蓄積はほとんどないのが現状。日中の

母兄兄弟だ。それなりの付き合い方を決め、ある一定の一定以上は触れてはいけない。金銭的な貸し借りや、恩を売るような感情は避けなければいけない。

富国強兵のため日本のいいところだけは利用しようということだ。「中体西用」という言葉がある。日本でいうから「和魂洋才」ということでも、もともになるのは中国、中

かし二歩裏へ入ればゴミの処理も出来ない、エレベーターもどう動かせばいいか分からない。「一夜漬けの近代化」の見本みたいなものだ。第一、あんなだらついとろくに高層ビルを建てる必要があるのか。おかしいことがあちこちで起つてゐる。地方分権を進めず、全体計画との不整合も出てきている。外債も百億^{ドル}を切っている。貿易

たといつて、なにも殺処分なくともいい。西側に向けての顔の奥に、社会主義の奥の奥のぞいていゝ正を忘れてはいけぬ。

陳雲は、計画経済で中国をよくしていこうという考え。「鳥か」経済論」といふえゝもので、鳥か」をしっかりと作っておかなければ、栄養を亡て大きくなった鳥が逃げていゝことになる。いゝといゝ

を言うのも、外交上のテクニックで、それを聞いて「はあ、そうですか」と引き下がってきた方が人がいい。

そういったことを考えると、将来中ソ関係が親密化していくことを予測すべきで、日中関係や国際関係も立面的視野に流されることなく、長期的視点からみて安全保障、外交を考えていかなければならない。

霸權条項その後

の至正問題諮問会(特別
査問委)に引つ張り出され、
北京や上海の代表から諮問さ
れた。たじろとなつてゐる。
その議事録の中で私は二つの
意見が気になった。一つは日
本の鉄鋼不況のしわ寄せを中
国が受ける必要があるか、と
いうもの。もう一つは、中国
の近代化の根幹を再び日本独

さて、日中友好条約の問題。覇権条項が盛り込まれたが、それは当時の毛沢東戦略の産物で、ソ連を社会帝国主義とみなす戦略思想が反映し

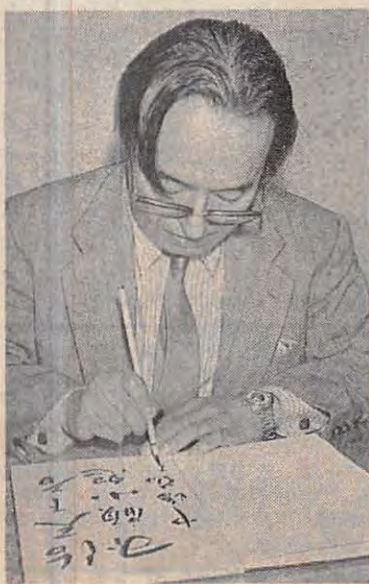
批判が運動の開放精神を体内に對してうつっている。いままで左にうつっていたのを右にうつた花が咲いてゐた。農家は花見でうかれているが先づ谷がもたれないといふこととだ。將來は、右の峰を目標すのか左の峰を目標すのか。開放政策のすみか多ければ陳平の意見が有力になる。

アルヒポフ訪中後

システムの省エネプロジェクトで、あり余る過剰労働力をどう吸収するかという新しい矛盾にぶつかる。私が担当者なら地下鉄などもっと基礎的なインフラストラクチャーに力を入れるべきだと言った。るつ。

見ればわかる。
ソ連が覇権条項を口実に軍事化を図った北方領土問題も日本の外交コストの一つ。当時は日ソ関係が悪くなるとの問いかけはなかった。日中の一つの選択のリアクションは大きく、軍事協力もアジアに

昨年十二月、ソ連のアルヒポフ第一副首相が訪れ中ソ経済貿易・科学技術合同委員会が生まれた。これに対し米中間は、原子力協定も宙に浮いたままで同床異夢の感が強い。一方、中ソ関係はアルヒポフ訪中後、ハルビンにあつ



中嶋教授が揮ごう

「天下を治める者は小
怨（えん）を顧みず」